

文化・経済フォーラム滋賀では平成 23 年の発足以来、滋賀の文化の振興と経済の活性化のための新たな方策について提言を行うことを事業の重要な柱としてきた。平成 24 年から 27 年まで、下記の 4 つの提言を行うとともに、これらの提言の実践としての「文化ビジネス塾」の開催をはじめ、「文化で滋賀を元気に！賞」の表彰、「近江屋」研究プロジェクトなどの諸事業を行っている。

これらフォーラムの活動を総括しつつ、以下の提言を行う。

提 言

新生美術館計画の実現と滋賀の魅力の発見・発信へ

これまでの提言

平成 24 年 『文化ビジネスの開発で滋賀の文化と経済に新展開を』

平成 25 年 『文化・芸術・ビジネスの見本市としての国民文化祭へ』

平成 26 年 『滋賀の文化を発信する国民文化祭を早期に、

スポーツイベントと連携した開催へ』

平成 27 年 『自然・歴史・暮らしが統合された地「近江」の発信を

～“近江遺産”“近江八百八景”から日本遺産そして世界遺産へ～』

新生美術館計画の実現と滋賀の魅力の発見・発信へ

昨年 10 月、フランスから前ナント市長で前首相のジャン・マルク・エロー氏が滋賀県を訪れ、文化による都市再生について講演をされている。また 12 月には我が文化・経済フォーラム滋賀の主催により近江屋研究プロジェクト研究報告会の一環として、前金沢市長山出保氏から歴史と文化のまちづくりについてお話を伺ったところである。

ナントも金沢もその文化をまちや経済の活性化につなげた、世界そして日本での代表的な成功例であると言える。この二都市に共通するのは、歴史や伝統を尊重し生かしながら文化に対するハード、ソフトの両面での多様で継続的な投資がなされていることである。

滋賀県内では、これらの都市に匹敵するほどの継続的で大規模な文化投資を見ることはできないとしても、滋賀は古代から開け、多様な歴史的な文化遺産が蓄積し、それが琵琶湖に代表される自然に寄り添いながら、生活と一体となって現代に息づく地である。これからの文化的な投資を戦略的に行うことによって、ナントや金沢とは異なる形で、文化と経済が相互に刺激し合い、暮らしやすさと同時に新たな発展が生まれる地域として未来を拓くことが可能であると考えられる。

県内では近年の経済・財政状況から、文化関係での大規模な施設建設などは見られなかったが、現在、県では新生美術館構想が進められている。それは大

津市瀬田丘陵の県立近代美術館を、神と仏の美、近代・現代美術、アール・ブリュットという3つの分野の美術館として再整備しようとするものである。

近年の県立の大規模文化施設としてはびわ湖ホールと琵琶湖博物館が挙げられるが、ともに県外や海外への強い発信力を持っており、新生美術館もそれに続く施設になることが期待される。

もとよりこれらの文化施設は、県民が文化芸術あるいは自然について、体験し、学び、考え、楽しむことにより、生きるための知恵や活力を得ることができ自由な場所でなくてはならない。また、それと同時に全国や世界から評価される活動を展開する拠点としての機能、県内の様々な活動を結ぶ機能、未来のための人材を育てる機能などが求められる。新生美術館については、これらを実現するための具体的な方策を明らかにされ、県民や有識者との議論を経て、その構想の実現を図られることを期待したい。

新生美術館は、その建築を世界的に評価される設計事務所 SANAA が担当することも含め全国的な注目を浴びている。開館予定は2019年度であり、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けての文化プログラム、また、2024年の滋賀での国民体育大会・全国障害者スポーツ大会の開催に向けての文化プログラムなど文化に関して県民や国民の関心を喚起する様々な機会が続く時である。また、当フォーラムがこれまでも提言してきた国民文化祭の滋賀県開催が視野に入る時期でもある。滋賀への来訪者も増えることが予想され、これを滋賀の文化発信の好機とすべきである。

歴史、自然、暮らしが一体になった滋賀の文化の特質については昨年の提言で触れたところであるが、滋賀の風土は、訪れる人自身が一定の時間をかけた体験を通して、その人にふさわしい価値を発見することが出来る場所である。司馬遼太郎は、『街道をゆく』を近江からはじめ、白洲正子は『近江山河抄』で、近江のことを「えたいの知れぬ魅力」と形容した。近江に惹かれた先達にならって、風土に溶け込んでそれを学び、楽しむことは、文化や環境の持続性を確かなものにし、新たな観光のあり方にもなる。来訪者には滋賀ならではの発見に満ちた滞在をしてもらう必要がある。

新生美術館構想では、「美の滋賀」の入り口として、多くの人を県内各地に誘うことが、その使命として謳われている。これは価値発見のために重要な考え方である。滋賀の魅力はどこか一か所、何か一つではなく、多様な小さな魅力が遍く各地に潜在していること、そしてその発見が一人一人に委ねられていることである。新生美術館だけでなく様々な施設、機関、組織において県内各地の魅力へと誘う機能を備え、それらがつながり、そして同時に、関係する団体や企業、行政が滋賀の文化発信と受け入れ体制の整備を行うことが必要である。そして、滋賀の魅力に深く参入する人たちを増やすことで、大量消費やマスツーリズムではない持続可能な文化、環境、観光の実現へとつなげるべきである。